

論文審査結果の要旨

本論文は、主として中国語の疑問不定詞の認可条件と量化表現のスコープ解釈を研究することにより、wh-in-situ 言語の特性を解明しようとしたものである。日本語や中国語のwh-疑問文のように疑問詞が節頭に移動せず文中に残る言語は、一般的にwh-in-situ 言語と呼ばれるが、このような言語の疑問不定詞の生起に関わる局所性制約と量化表現のスコープ解釈について、本研究では具体例に基づいて詳細に検討し、統語構造と意味特性の関係を明らかにしたものである。

本論文の第1章では、理論的枠組みを概略した。第2章では、中国語の疑問詞のスコープ解釈においては、無形のQ particleを仮定する必要があることを立証した。そして、Watanabe (2003), Hagstrom (1998) の日本語の疑問詞と文末詞との共起制限に関する研究に基づき、日本語とは異なり中国語には2種類の疑問不定詞があると主張した。特に注目すべきは、島の効果と介在効果で観察される2種類の疑問詞の非対称性に対する議論である。この非対称性自体は従来から知られていたが、十分な説明がなされていなかった。第3章では、2種類の疑問不定詞の非対称性について、先行研究で主張されているような単なる項と付加詞の相違では説明できないことを示し、統語操作の相違により自然に説明できることを明らかにした。島の効果に現れる非対称性は、移動の局所性条件によって説明され、介在効果及びECP効果は、局所性に加えて他でも必要な一般原理であるIsomorphic Principleで説明できると主張した。

第4章では、疑問詞の解釈の多義性について検討した。主語位置に全称量化詞があり、目的語位置に疑問詞があるとき、疑問詞には3通りの解釈がある。このような場合、in-situ 疑問詞と全称量化詞の相互作用により3通りの解釈が予測できることを原理的に示した。特に、逆スコープが現れる特殊な場合について、その統語環境がChomsky (2004) のフェイズ領域によって説明できることを示した点は、注目に値する。

第5章では、全称量化表現 *dou* の分布と統語特性を考察した。従来は、量化表現の全称解釈は、*dou* の左方に現れるという「左方条件」が注目され、一見すると一般的な認可条件の例外のように見える。しかし、本研究では新たな事実に着目し、移動前の元位置は *dou* によってC-統御されねばならないことから、量化表現の全称解釈とwh-in-situ 構文の認可に共通の統語的条件があることを示した。そして、意味的側面と統語的側面の両者が、その適格性に重要な役割を果たしていることを明らかにした。

本論文は、主に中国語の統語構造と疑問詞・数量表現のスコープ解釈に関する研究であるが、本研究の成果は、wh-in-situ 言語の統語構造と意味関係に関する基礎的研究として重要な役割を担うものであり、また生成文法における理論研究において大きな貢献をすることができる。

以上のことから、本調査委員会は、本論文の提出者が博士（文学）の学位を授与されるに相応しいと認めるものである。